

ケアウィル講座のプログラム達成度評価

研究分担者 中森 義輝

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科 (システム知識領域) 教授

1. はじめに

本分担研究においては、分担者が研究開発を続けている「知識構成システム論」¹に基づいて、ケアウィル講座の評価及び参加者自身の自己評価を実施してきた。1年目は、知識構成システム論を発展させたケアウィル講座の評価モデルを作成し、「知識創造」の視点から参加者に講座の評価と自己評価を実施してもらった。2年目は、「知識構成システム論」の中の「知識の連続再構成モデル」を用いて、参加者の「意欲創造」を調査する手法を開発し、1年目及び2年目の参加者に対してアンケート調査した。そして最終年度は、ケアウィル講座は一種のサービスシステムであるが、参加者の前向きな努力がなければ価値が創造されないことを考慮しつつ、どのような「価値創造」がなされたかを調査することにより、ケアウィル講座の評価に結び付けた。

本報告では、まず「知識の連続再構成モデル」を紹介し、このモデルを発展させたケアウィル講座の評価モデルによる講座参加者へのアンケート調査結果を報告する。次に、参加者の意識レベルの変化を追跡する方法を紹介し、参加者へのアンケート調査結果を報告する。最後に、講座がサービスシステムとしてどのような価値を創造してきたかについて同様にアンケート調査の結果を整理して報告する。それぞれの報告の中で、本プログラムの達成度を自己評価するとともに、さらなる発展に向けた今後の課題をまとめる。

2. 知識の連続再構成モデル

このモデルの目的は、客観的情報と個々の人間の持つ断片的知識を組み合わせ、誰も持っていない知識を導出することである。新しい知識は創発的知識と呼ぶことができるが、明示的に表現することができない「暗黙知」である。「暗黙知」でないとすれば、少なくともシステムがそれを持つことになり、誰も持っていない知識という言い方に矛盾する。したがって、創造された「暗黙知」を「形式知」に変換するプロセスを我々のシステムは保有していなければならない。これは、プロジェクトのメンバーあるいは問題関与者が知識創造システムの一部を構成することを意味する。このモデルが持つ存在論的要素は以下の5つである。

- **介入** (Intervention) (問題を解こうとする意志・行動): 直面する複雑な問題状況に対して行動

¹ 中森義輝, 知識構成システム論, 丸善株式会社, 2010年

を起こす。新たな問題を解決するためには、どのような知識が必要であるかについて考察し、以下の3つのサブシステムにそれらの知識の収集を依頼する。

- **集成** (Intelligence) (科学的・客観的知識): ものごとを理解し学ぶ我々の能力を高める。必要なデータと情報を収集し、それらを科学的・論理的に分析し、最適化を図るためのモデルを構築する。
- **連携** (Involvement) (社会的動機): 我々と他の人々の関心や情熱を高める。会議の開催、聞き取り調査等により、人々の意見を収集する。
- **想像** (Imagination) (創造性の持つある側面): 新しいあるいは既存のものごとに関する我々自身のアイデアを創り出す。部分的な情報に基づいて複雑な現象をシミュレートする。
- **統合** (Integration) (システム知識): 上記の3つのサブシステムからのアウトプットの信頼性・正当性を検証する。異質の知識を密接に関連するように結合する。

図1に知識の連続再構成モデルの概要を示す。図2は社会実践論として再定義したものである。

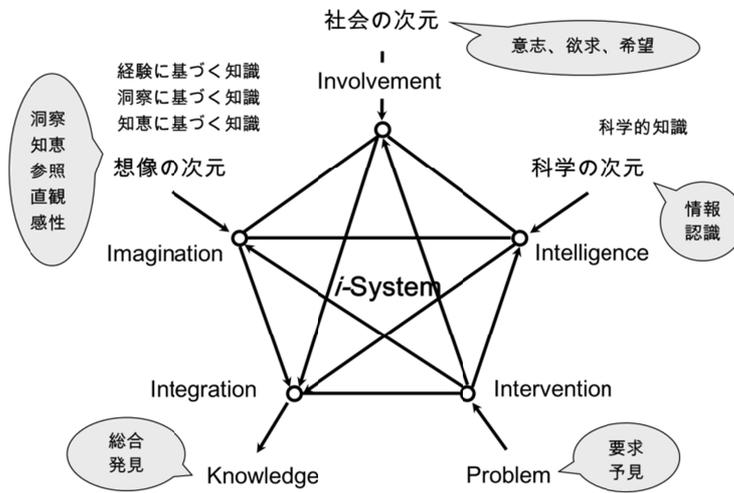


図1：知識の連続再構成モデル

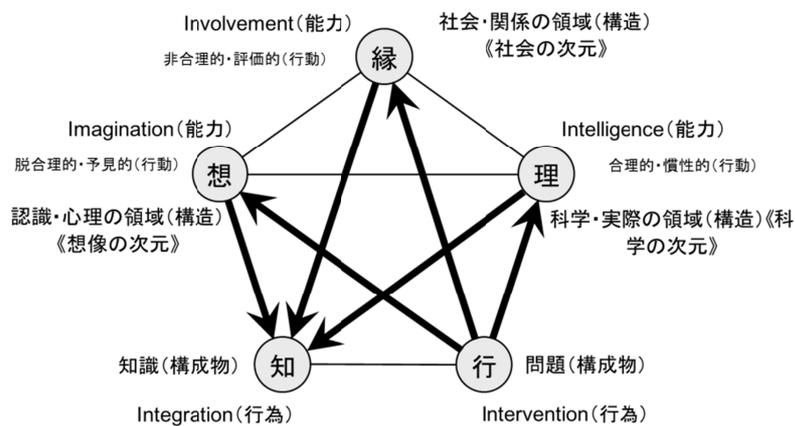


図2：モデルの社会実践論的解釈

ここで図2について補足する。知識は組織や社会において人々によって構成され消費される。図2は、これを考慮して以下のような概念を用いて知識創造を説明しようとしたものである。

- **構造** (Structure): 全体論的・集合的な文脈及び基本原理であって、人間の行動を促進あるいは逆に制限する。
- **能力** (Agency): 社会的存在であるアクター達が世界を再生産し変換する能力。
- **構成** (Construction): アクター達が構造と能力を再生産し変換するプロセス。

知識はアクター達によって構成されるが、アクター達は社会的構造によって行動が促進、あるいは逆に制限される。図2に示すように、社会的構造は、図1の3つの次元(科学、社会、想像)に対応して、以下の3つの領域からなるものとみなす。

- **科学・実際の領域** (Scientific-actual Front): 証拠等によって明らかな事象(確立された理論、増加する技術力、氾濫する情報、社会経済の傾向)
- **社会・関係の領域** (Social-relational Front): 道徳や社会法則等拘束力を持つものに基づいた責務(社会規範、価値、期待、力関係、正当性)
- **認識・心理の領域** (Cognitive-mental Front): 個人的な判断に基づいた義務・責任(考え方、慣習、隠れた仮定、有力な論理、パラダイム)

それぞれの領域においてアクター達に要求される主要な能力を、それぞれ集合力(Intelligence)、連携力(Involvement)、想像力(Imagination)と想定する。また、それぞれの領域におけるアクター達の行動は、それぞれ合理的(Rational)、評価的(Evaluative)、予見的(Projective)なものとなる。図2では、構成(Construction)を社会的行為(Social Action)とその結果としての構成物(Constructs)に分けて表現している。「知ること(Integration)」と「行うこと(Intervention)」は互いを触発する(知行合一²)。これにより、知識は創造され具現化され、さらに社会構造とアクター達の能力にフィードバックされる(図3参照)。

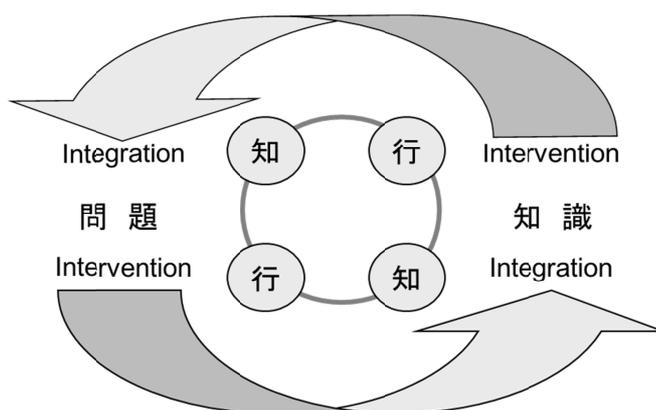


図3：知行合一（東洋思想における知識と行動）

² 真に知ることには必ず実行を伴う。知と行とは表裏一体で別のものではないという説。中国の明の時代に王陽明が唱えた儒学の思想で知(知識)と行(行動)は合一(合致)していなければならないという考え。知識が先で実践は後からという宋の朱子の先知後行説に対して唱えられた。

3. ケアウィル講座の評価モデル

ケアウィル講座を知識創造の場として「知識の連続再構成モデル」を変形して8項目のチェックリストを作成した。評価の視点は「情報が知識に変容したか」であって、図4に示すような3つのスパイラルからなる。詳しくは図5参照。

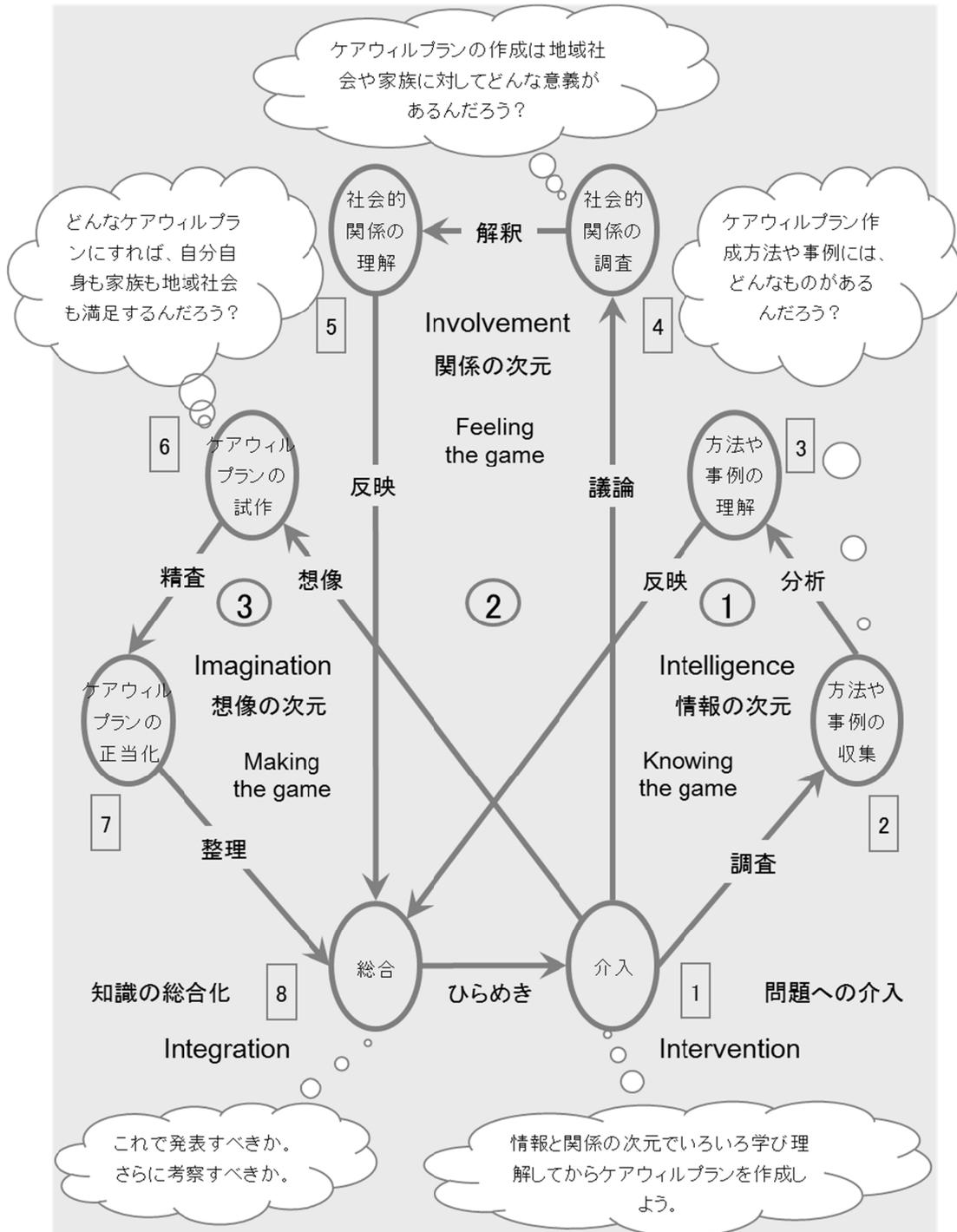


図4：知識創造場評価のスキーム

ケアウィル講座の評価項目

視点：情報が知識に変容したか（3つのスパイラルから観る）

- ① 全体的な意義に関して（知行合一：行為と知識の一体性）
 - 1 ケアウィルプラン作成の合理的計画（行為）
 - 8 ケアウィルプラン作成という成果（知識）
- ② ケアウィルプラン作成法に関して（情報から知識へ）
 - 2 ケアウィルプラン作成法や事例に関する調査（情報）
 - 3 ケアウィルプラン作成法や事例の理解（知識化）
- ③ ケアウィルプラン作成・実行の社会的意義に関して
 - 4 ケアウィルプラン作成の社会的意義の調査（情報）
 - 5 ケアウィルプラン作成の社会的意義の理解（知識化）
- ④ ケアウィルプランの作成と正当化
 - 6 ケアウィルプランの検討・試作（情報）
 - 7 ケアウィルプランの正当化（知識化）

A1 A2 A3 A4 A5 A6 A7 A8

自分の意思や努力による行動の変化（個人的変容を評価する）

B1 B2 B3 B4 B5 B6 B7 B8

講座の影響による気持や行動の変化（講座の意義を評価する）

図5：ケアウィル講座の評価項目

図5の①～のそれぞれについて、図6～図9に具体的な評価内容を提示する。

自己評価と重要性

Intervention and Integration

A1

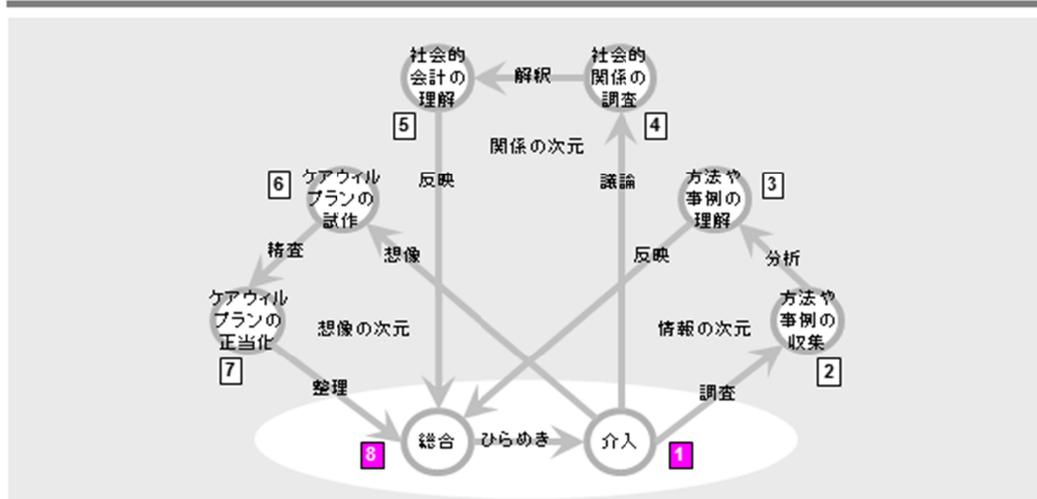
- あなたはケアウィルプランを立てるための合理的手順を十分学びましたか。
- その合理的手順はケアウィルプランを立てる上で重要であると思いますか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 重要ではない 1 2 3 4 5 重要である

A8

- あなたは実行可能で社会的意義のあるケアウィルプランを作成できるようになりましたか。
- そのようなケアウィルプランを作成できることは今後の人生で重要であると思いますか。

未だにできない 1 2 3 4 5 できるようになった
 重要ではない 1 2 3 4 5 重要である



ケアウィル講座の評価と必要性

Intervention and Integration

B1

- 講座では、ケアウィルプラン作成の合理的手順について十分な指導を受けましたか。
- そのような指導をあなたはもっと必要としていますか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

B8

- 講座では、ケアウィルプランの実行可能性や個人的・社会的意義について十分な議論や指導がありましたか。
- そのような議論や指導をあなたはもっと必要としていますか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

図6：全体的な意義に関する評価（知行合一：行為と知識の一体性）

自己評価と重要性

Agency=Intelligence

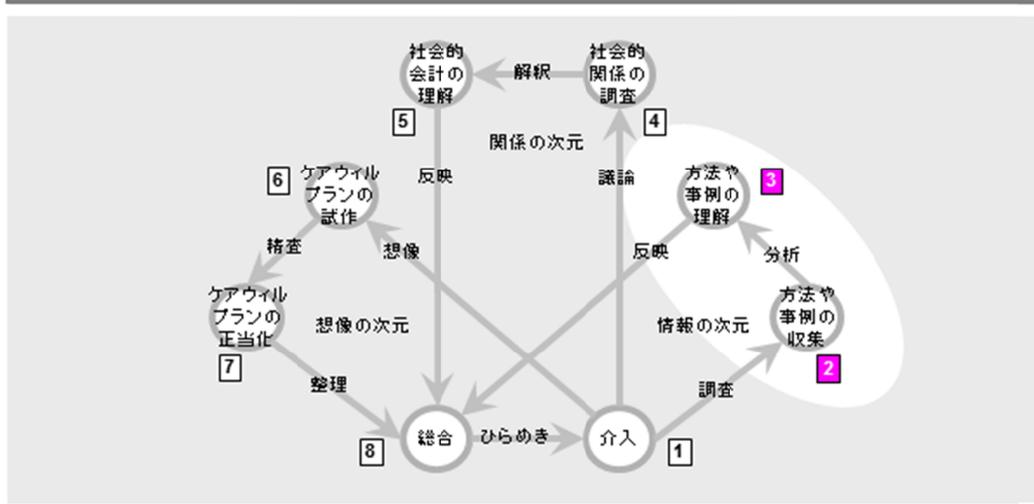
A2

- あなたは、ケアウィルプランの作成法や事例を十分に調査・学習しましたか。
- そのような調査・学習をすることはケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である重要ではない 1 2 3 4 5 重要である

A3

- あなたは、ケアウィルプラン作成法や成功事例の意義について説明できますか。
- そのような説明ができることは、ケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

未だにできない 1 2 3 4 5 できるようになった重要ではない 1 2 3 4 5 重要である

ケアウィル講座の評価と必要性

Agency=Intelligence

B2

- 講座では、ケアウィルプラン作成法や事例に関する情報は十分に用意されていましたか。
- そのような情報は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

B3

- 講座では、ケアウィルプラン作成情報を理解するための十分な指導がありましたか。
- そのような指導は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

図7：ケアウィルプラン作成法に関する評価（情報から知識へ）

自己評価と重要性

Agency=Involvement

- A4**
- あなたは、ケアウィルプラン作成の社会的意義について十分な情報を収集・学習しましたか。
 - そのような情報を収集・学習することは、ケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

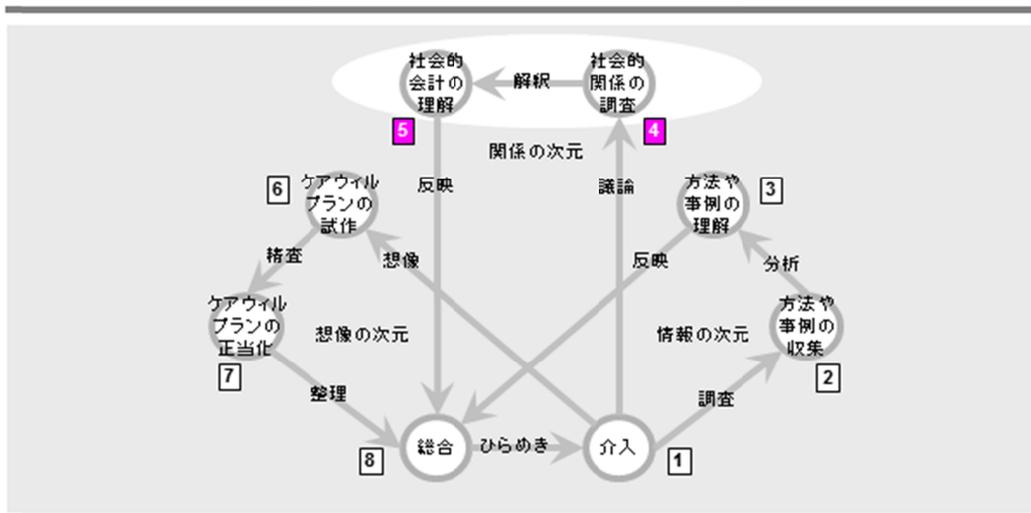
十分ではない 1 2 3 4 5 十分である

重要ではない 1 2 3 4 5 重要である

- A5**
- あなたは、作成したケアウィルプランの社会的意義を説明できますか。
 - そのような説明ができることは、ケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

未だにできない 1 2 3 4 5 できるようになった

重要ではない 1 2 3 4 5 重要である



ケアウィル講座の評価と必要性

Agency=Involvement

- B4**
- 講座では、ケアウィルプラン作成の社会的意義に関する情報は十分に用意されていましたか。
 - そのような情報は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である

必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

- B5**
- 講座では、ケアウィルプラン作成の社会的意義を理解するための十分な指導がありましたか。
 - そのような指導は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である

必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

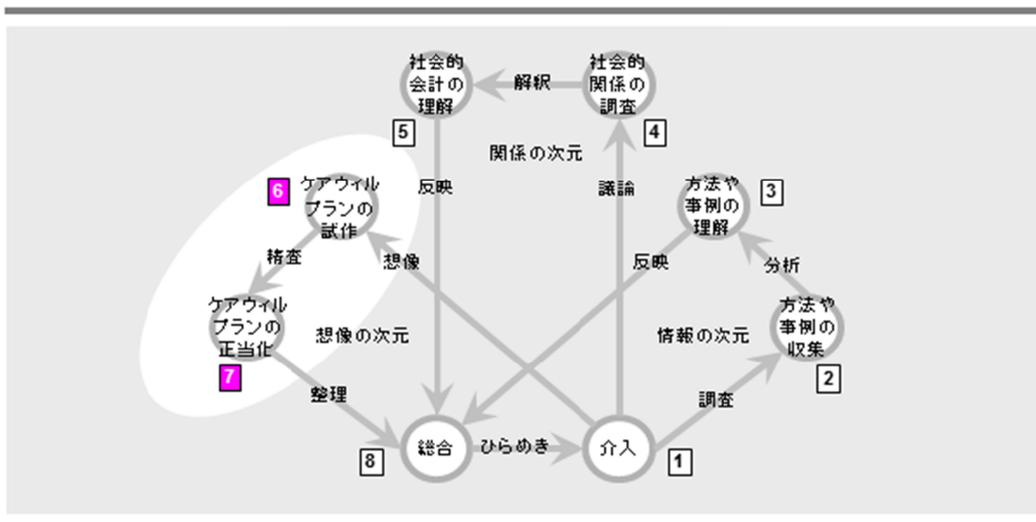
図 8 : ケアウィルプラン作成・実行の社会的意義に関して

- A6**
- あなたは、あなたの今後のケアウィルプランを十分想像しましたか。
 - そのような想像をすることは、ケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 重要ではない 1 2 3 4 5 重要である

- A7**
- あなたは、想像したケアウィルプランの実行可能性・正当性について説明できますか。
 - そのような説明ができることは、ケアウィルプランを作成する上で重要ですか。

未だにできない 1 2 3 4 5 できるようになった
 重要ではない 1 2 3 4 5 重要である



- B6**
- 講座では、今後のケアウィルプランの想像を促進させるような十分な指導がありましたか。
 - そのような指導は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

- B7**
- 講座では、ケアウィルプランの実行可能性・正当性について十分な議論や指導がありましたか。
 - そのような議論や指導は、ケアウィルプランを作成する上で必要ですか。

十分ではない 1 2 3 4 5 十分である
 必要ではない 1 2 3 4 5 必要である

図9：ケアウィルプランの作成と正当化

4. ケアウィル講座の評価結果

初年度の講座終了後に受講生に対するアンケート調査の結果を図 10 に示す。

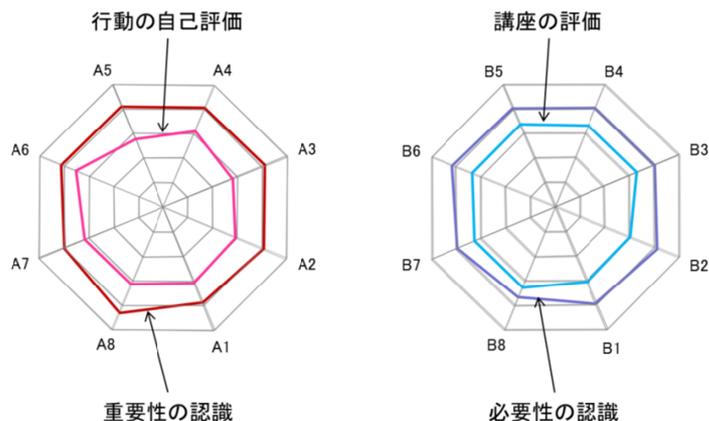


図 10：初年度の受講生による事後評価（受講生平均）

この結果から以下のことが推量される。

- **自己評価**：どの項目も同程度の重要性認識であるが、成果の重要性認識が他よりもやや高い(A8)。より良いプランを作りたいという気持ちが強いと思われる。社会的意義の認識はやや低い(A5)。一方、プランを検討するための情報は豊富に持っていると思われる(A6)。
- **講座評価**：どの項目も同程度の必要性認識であるが、成果の必要性認識が他よりもやや低い(B8)。講座の意義が浸透していないことがうかがえる。どの項目も必要性のレベルに対して講座の評価が1点弱低いことから、講座に改善の余地があると思われる。

2年目の学生に対しても同様な調査を実施した結果を図 11 に示す。自己評価の傾向は初年度とほぼ同じであるが、講座の評価はかなり高くなっているとともに、さらにもっと必要であるという認識になっている。講座が洗練されてきたという評価が可能である。

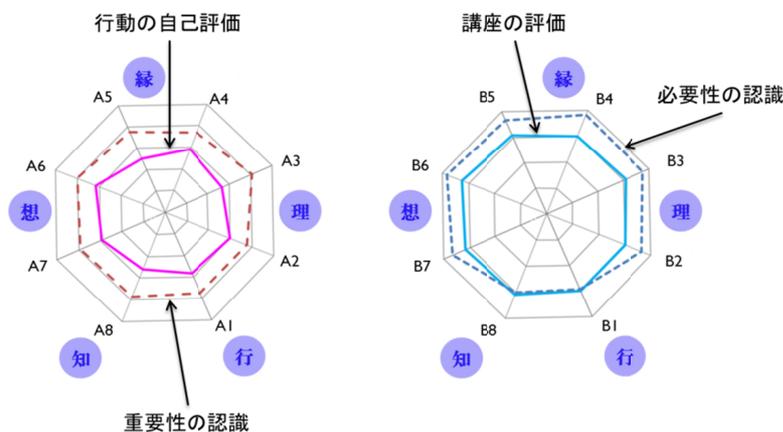


図 11：2年目の受講生による事後評価（受講生平均）

5. 意識レベルの評価

知識の連続再構成モデルの5つのノードにおける受講生の意識レベルを調査する。各ノードにおいて3段階の意識レベルを想定し、以下のような自己評価シートを作成した。

行（問題への介入）：一つの に✓（どれにも当てはまらない）

推進：計画を立ててみようかな（実行するかどうかはまだ決めていない）

決断：計画を立てて、実行してみようかな（という気持ちに、徐々になってきた）

専念：良い計画を立てて必ず実行するぞ（いつも、このことを考えるようになってきた）

理（情報の集成と理解）：一つの に✓（どれにも当てはまらない）

感情的な意識レベル：関連する情報がなんとなく気になる（重要性を感覚的に感じてきた）

直観的な意識レベル：関連する情報を集めることが重要だと思う

（重要性を直観的に納得してきた）

合理的な意識レベル：関連する情報を合理的に解釈できる

（重要性を人に語れるようになってきた）

縁（家族や地域との連携）：一つの に✓（どれにも当てはまらない）

個人で考えている：自分一人で将来について考えている

（アイデアは個人的には評価できている）

集団で話し合っている：グループにおいて将来について語り合っている

（アイデアを互いに評価している）

社会と関わっている：家庭や地域において将来について語り始めた

（家族や地域に認められつつある）

想（想像）：一つの に✓（どれにも当てはまらない）

定石的なアイデア：誰でもすぐに思いつくようなレベルにある

（すぐにできそうなアイデア）

発想的なアイデア：ユニークなアイデアが出せるようになってきた

（乗り越えるべき障害があるアイデア）

空想的なアイデア：夢のようなアイデアを語れるようになってきた

（人々の意識変革が必要なアイデア）

知（統合）：一つの に✓（どれにも当てはまらない）

専門的な知の統合：一つの分野の知で閉じている

（総合化の視点は、新規性、有用性、論理性）

学際的な知の統合：複数の分野の知の融合が必要

（総合化の視点は相互補完性。調整能力が必要）

文化横断的な知の統合：文化的に異なる分野の知の融合が必要

（総合化の視点は新文化の創造）

上記の調査と以下の4つの時点における自己評価を受講生に依頼した。

- 現状の姿（講座参加直後）**現在**
- 以前の姿（講座参加以前）**過去**
- 将来の姿（なりたい姿）**未来**
- 現状の姿（講座参加半年後）（昨年度の参加者のみ）

23年度生（初年度生）には、受講前、受講直後、受講後半年後、そして、将来のなりたい姿について回答を求めている。受講生23人中16人が回答している。24年度生には、受講前、受講直後、将来のなりたい姿について回答を求めている。受講生18人中17人が回答している。そこで、23年度生については、受講前、受講直後、受講半年後における意識の違いを分析した。また、23年度生及び24年度生のすべてのデータを用いて、受講前、受講直後、及びなりたい姿に対する意識の違いを分析した。

図12に各ノードにおける意識レベルを示す。0は調査で「どれにも当てはまらない(どのレベルにも達していない)」を意味するものとする。

ここでデータの扱い方に関する釈明をする。図12におけるレベル0,1,2,3は分類なので、厳密には t -検定は使用できない。にもかかわらず、それらを問題への没頭レベルであるとし、 t -検定を実施した。平均値の大きさは「受講前<受講直後<将来」と予想されるが、逆転している個人データもあるため、両側検定を使用した。

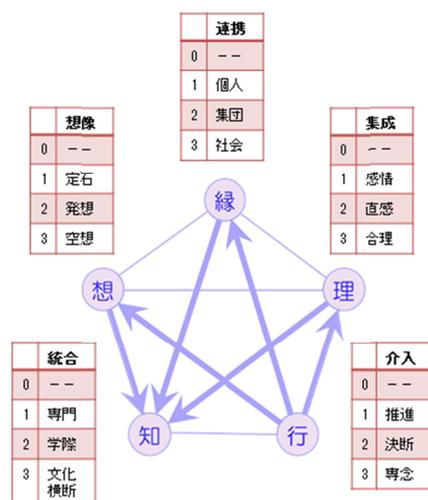


図12：各ノードにおける意識レベル

図13と図14に結果を示す。図13は、23年度生と24年度生の全データを用いて「受講前」「受講直後」そして「将来のありたい姿」について回答の平均に有意差があるかどうかを検定したものである。図13を見ると、ほとんどの組み合わせにおいて「有意な差」が見られる。1か所のみあまり差がないところがあるが、それはアイデア創造力の部分であり、受講前後で変化がないのは理解できる。受講前後で「有意な差」があるということは、受講したことに意義を感じているということの意味し、ありたい姿と「有意な差」があるということは、さらに頑張ろうという意思の表れであり、講座に一定の意義があったことを示唆していると考えられる。

一方、図14は23年度生のデータを用いて、「受講前」「受講直後」そして「半年後」の意識レベルを調査したものである。半数程度の箇所で「有意な差」がないという結果が得られている。これは一つには、23年度生は昨年の意識を質問していることによる「曖昧さ」が存在すること、また、半年後には意識レベルを上げるような活動を実行していない可能性があることを示唆しており、さらなるアフターケアが必要である。そのためには、修了生を集めて意識レベルの向上を促進する必要がある。

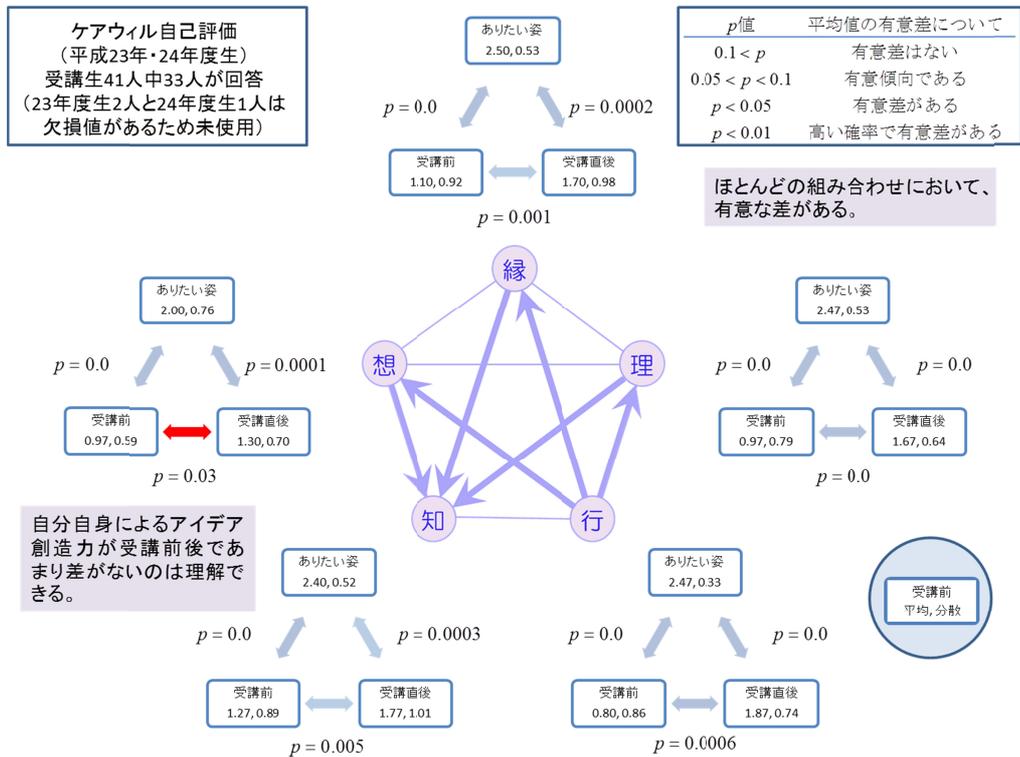


図 13 : 「受講前」「受講直後」「将来のありたい姿」の意識レベルの差

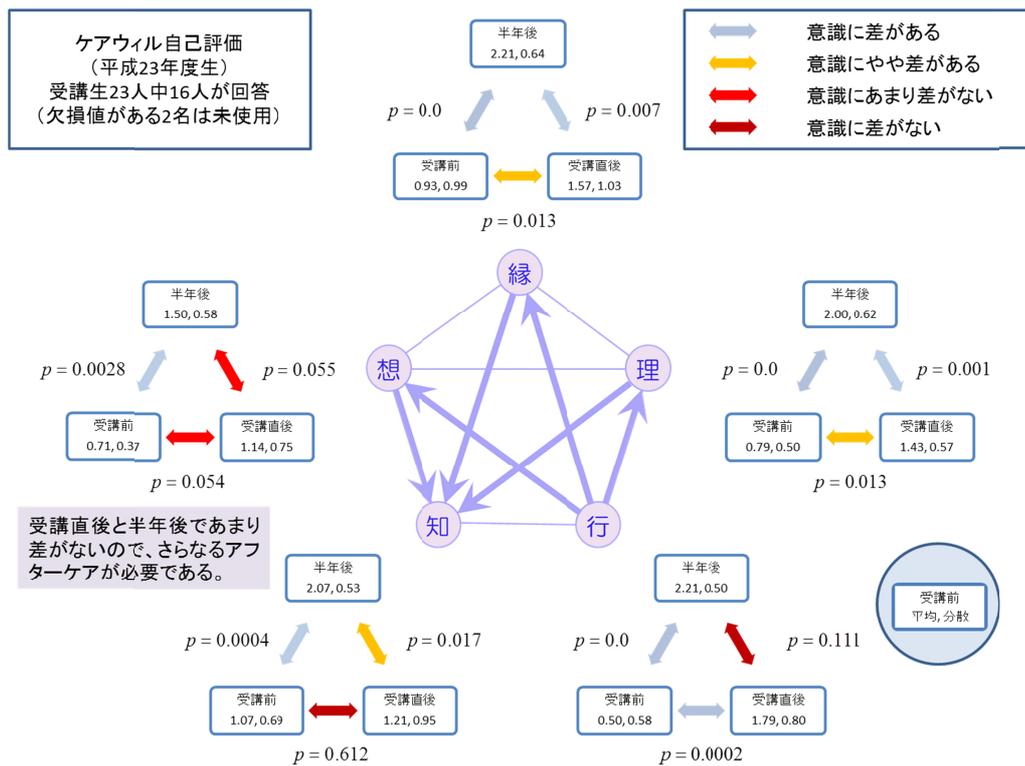


図 14 : 「受講前」「受講直後」「半年後」の意識レベルの差

6. 価値創造について

サービスシステムと言われて連想するものは非常にたくさんある。例えば、レストラン、ホテル、デパート、バス、タクシー、上下水道、電気、病院、保育所、学校、学習塾など、すべての経済活動はサービスであると言っても過言ではない。ここで、サービスの価値について考えるとき、二つのグループにグルーピングできる。一つは、顧客が受容するサービス価値に対価を支払うが、顧客自らが努力してその価値を創造するものではないグループで、レストランやホテルが含まれる。利用者にとって、価値は利用料金の価値と等価であるとみなされる。一方、利用者自らが努力しなければ大きな価値が創造できないグループが存在する。英語塾などが典型であり、高い授業料を支払って受講しても、十分な予習復習により成果を挙げなければ価値創造につながらない。病院にしてもそうである。医者から適切な診療やアドバイスを受けても、自ら摂生しなければ、繰り返し診療を受けることになる。

このように、サービスシステムといっても、病院、クリニック、スポーツジムなどのように、指導に従って自己管理するかどうかで価値が変わるサービスシステムが存在する。また、学校、学習塾、ピアノなどの習い事のように、システムへの入力要素（サービス受容者）に責任があり、自己努力が求められるサービスシステムが存在する。価値共創システムとは、以下のようなシステムである。

- システム利用者の協力（努力）が得られないと価値が高まらないシステム。
- システムへの入力要素（利用者）が、一時的にシステムの一部を構成する。
- システムの要素との相互作用、相乗効果によって、価値を共創しなければならない。

ケアウィル講座もサービスを提供するシステムではあるが、図 15 に示すように、情報を知識に変換する行為を通じて、サービス受容者が価値の創造に貢献しなければ成功しないシステムである。

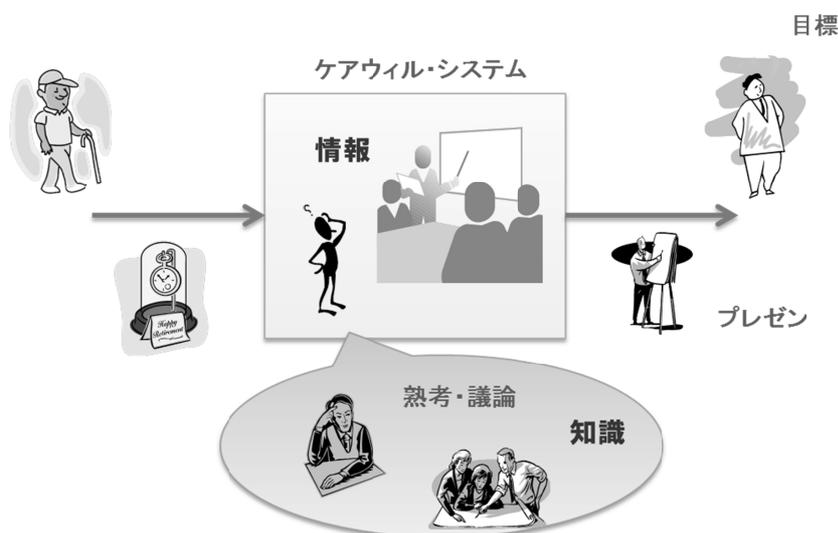


図 15：図 2：価値を共創するケアウィル・システム

サービスを受けただけでは、価値は生まれない。なぜなら、それは情報を提供されただけだから。

サービスの価値は、情報のレベルではなく、知識のレベルになって初めて顕在化する。情報を価値のある有用なもの（知識・知恵）に変換するにはエネルギーが必要である。情報を知識に変換するエネルギー（能力）は、やはり、（蓄積され、吟味された）知識・知恵である。ただし、その知識・知恵も、問題に即して使うことにより、研ぎ澄ましていく必要がある。

知識の連続再構成モデルでは、図 16 に示すように、科学・実際の領域、社会・関係の領域、認識・心理の領域を何度も行き来して情報を知識化し、価値を創造して行くものとしている。

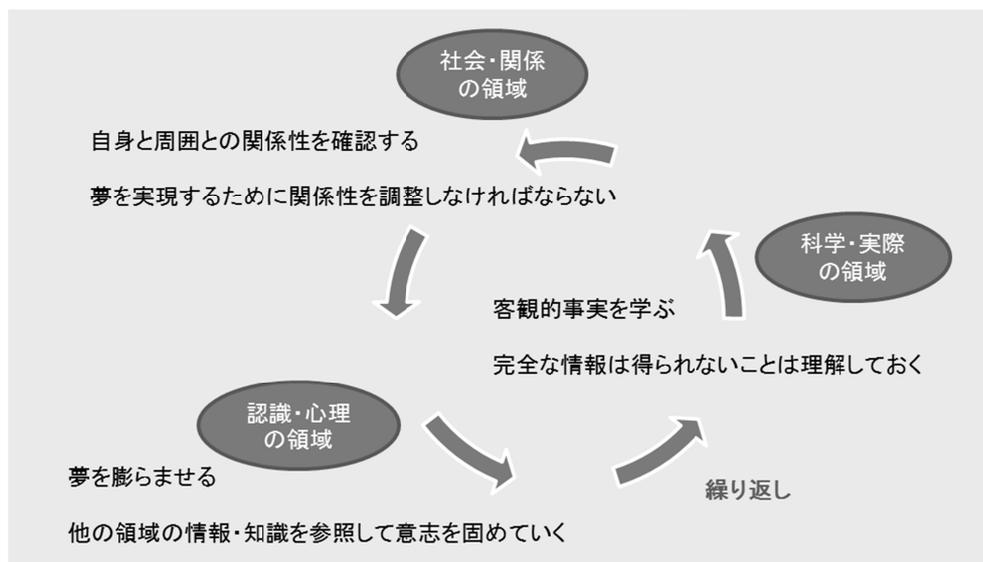


図 16：情報を知識化する繰り返しプロセス

7. ケアウィル講座の価値についての評価

3 年目は、ケアウィル講座受講生に対して表 1 に示すアンケート調査を実施した。

表 1：ケアウィル講座の価値に関する調査項目

【理】自分にとっての新しい情報	価値の高い順に 3 つ程度
【縁】新しい関係性（再認識を含む）	重要と思う順に 3 つ程度
【想】自分で考えた新しいアイデア	実行したいと思う順に 3 つ程度
【知】新しい提案（報告）の価値	自分にとって 家族にとって 社会にとって 講座にとって
【行】新たに発見した課題	克服すべき課題を 3 つ程度

調査は、過去3年間の全受講生に対して実施した。毎年全く同じ内容の講義が実施されたわけではないので年によって多少のばらつきがある。共通している回答を以下に列挙する。

【理】自分にとっての新しい情報

- 健康面について：医学的見地に加えて、社会的な分析
- 精神面について：精神面の向上によって健康面、経済面の問題解決につながる
- 社会面について：仲間づくりや社会活動への参加の重要性

【縁】新しい関係性（再認識を含む）

- 家族について：配偶者との関係の重要性の再認識
- 地域について：地域住民との新しい関係構築の重要性
- 仲間について：価値を共有する仲間の必要性（会社や趣味の仲間を含む）

【想】自分で考えた新しいアイデア

- 目標を創造すること：「特にない」が多いが、目標を創らなければという意識は芽生えた
- 健康を維持すること：健康維持のための行動について考え始めた
- 関係を構築すること：（具体的ではないが）仲間づくり、NPOづくりについて考え始めた

【知】新しい提案（報告）の価値

- 自分にとって：自分を見つめなおす機会を得た（ただし、新しい提案には至っていない）
- 家族にとって：互いを尊敬しあうことを再認識した（具体性は、まだ乏しい）
- 社会にとって：社会に貢献できることの重要性・喜びを認識した（具体性は、まだ乏しい）
- 講座にとって：講座の維持発展に貢献したい（ただし、行動するレベルに達していない）

【行】新たに発見した課題

- 目標設定：目標を創ること自体が大きな課題（生きがいを発見すること）
- 関係構築：家族関係、地域の人々との関係の再構築（特に、地域での役割を創造すること）
- 健康管理：健康な身体を維持すること（体力を向上、脳を活性化すること）

8. おわりに

初年度は、ケアウィル講座参加者の自己評価と講座自体の評価を、「知識の連続再構成モデル」に基づいた評価票を作成し実施した。自己評価と重要性、講座評価と必要性について、それぞれまだ大きな隔たりがあり、参加者個人としても、また講座運営者としても心構えやシステムに改善の余地があることが示唆された。2年目も同様な調査を実施した結果、自己評価についてはあまり差がなかったが、講座の評価は5段階で1段階弱の上昇が見られた。そこで、講座が初年度の評価を踏まえて洗練されてきたという解釈が可能である。

2年目は、知識の連続再構成モデルの5つのノードにおける受講生の意識レベルを調査した。各

ノードにおいて3段階の意識レベルを想定し自己評価シートを作成した。23年度生(初年度生)と24年度生の全データを用いて、「受講前」「受講直後」さらには「将来のありたい姿」について回答の平均に有意差があるかどうかを検定した。ほとんどの組み合わせにおいて「有意な差」が見られ、講座に意義があったことを示唆していると考えられる。ところが、23年度生(初年度生)のデータを用いて、「受講前」「受講直後」そして「半年後」の意識レベルを調査した結果、半数程度の個所で「有意な差」がないという結論が得られた。特に、半年後では意識レベルを上げるような活動を実行していない可能性があることが示唆されており、さらなるアフターケアが必要である。

最終年度は、ケアウィル講座は一種のサービスシステムであるが、参加者の前向きな努力がなければ価値が創造されないことを考慮しつつ、どのような「価値創造」がなされたかを調査することによりケアウィル講座の評価に結び付けた。その結果、ケアウィル講座に参加することによって意識レベルは向上していると判断できたが講座への出席だけでは具体的な目標づくりには至っていないことが判明した。すなわち受講生にとっては、多くの情報は入手したが知識、すなわち新しい価値を創造するに至っていない可能性がある。今後、修了生による「ケアウィル勉強会」を持続的に運営することにより、目標づくりとその実践、改善というサイクルが必要である。実際に、成功事例を創っていかなければ、ケアウィル講座の価値が認識されることは難しいだろう。

3年間の受講生の価値判断から、ケアウィル講座の中で、情報の提供を必要最小限にして、目標づくりの方法論を徹底的に教示し、受講生の目標づくりの時間を十分にとり、具体的な目標を設定させることを徹底させることが必要である、ということが一つの結論である。このような講座の改革を踏まえて、一段高いレベルのケアウィル講座を開始する必要がある。その際には、一度受講した人達にも再度受講してもらうことが重要である。要するに、同じような志を持った人々の量的拡大を図れば、量が質に変換していく、すなわち情報が知識に変換していき、講座の価値が認識されることにつながるであろう。

9. 発表論文と関連図書

1. Yoshiteru NAKAMORI (2012) “Consideration on Knowledge Synthesis and Creation”, at the 6th International Conference on Knowledge Management in Asia Pacific (KMAP 2012), 11-12 October 2012, Shanghai, China (Keynote Speech).
2. Yoshiteru NAKAMORI (2012) “Knowledge and Systems Science”, at the 13th International Symposium on Knowledge and Systems Science (KSS2012), November 19-20, 2012, Ishikawa, Japan (Keynote Speech).
3. Yoshiteru NAKAMORI (2013) “Knowledge Reconstruction and Justification for Regional Vitalization”, Journal of Systems Science and Systems Engineering 22(4), 457-468.
4. Yoshiteru NAKAMORI (2013) “Knowledge and Systems Science: Enabling Systemic Knowledge Synthesis”, CRC Press, Taylor & Francis Group, Boca Raton, 234p.